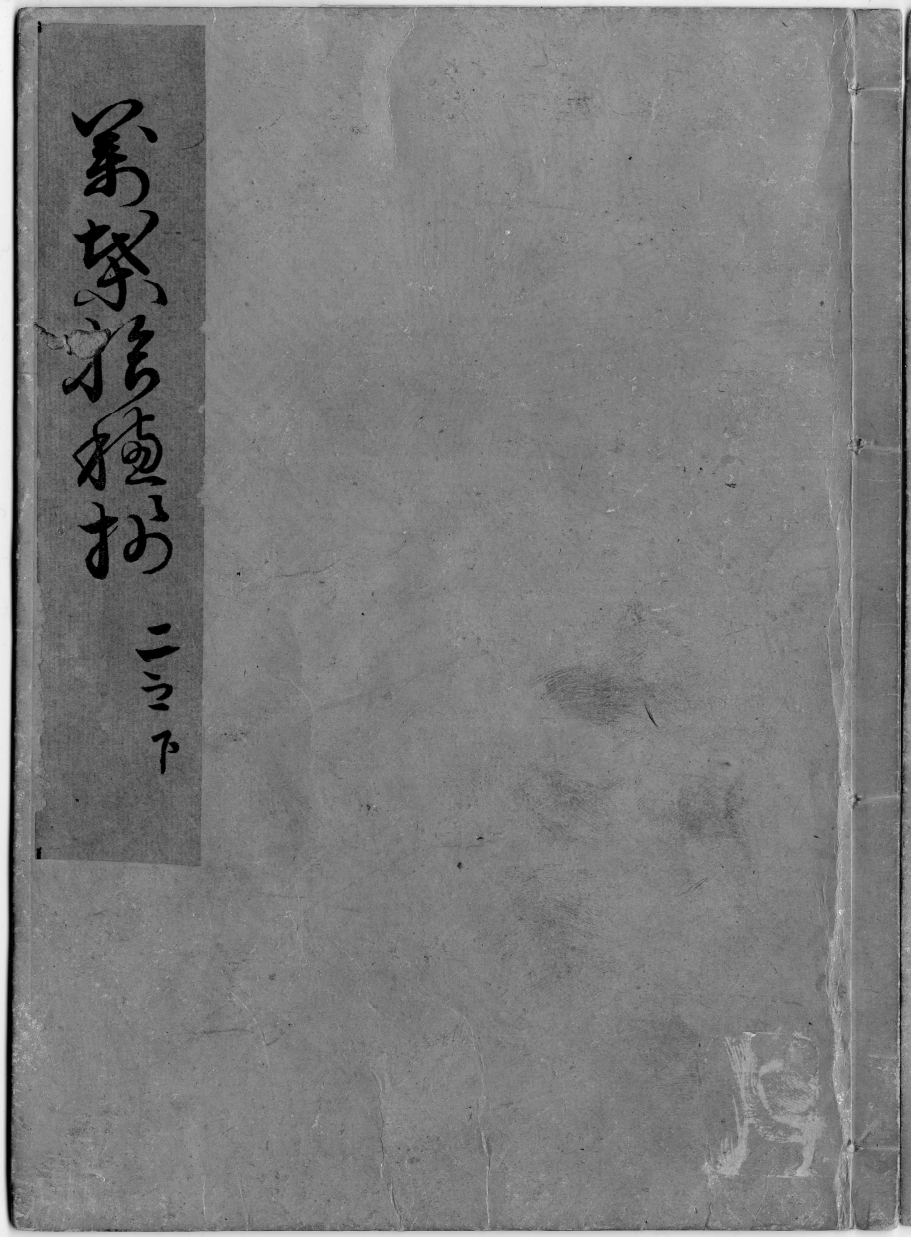

第柔術稽古
二ノ下

天皇崩時歌二首

太上天皇

燃火物取而褶而福路庭
こもりてしみてしかはへ
入登不言八面知(ヲチ)男(ヲノコ)雲くし仙鳥
いそすやおとしるなく
向南山夕陣雲之青雲之
星離去月年離而
あれゆきさもわれく

天皇崩後八年九月九日奉為御斎(ヲホンタメニセンヲカ)会(ノ)夜夢裏賜(ウチニタマフ)御歌一首 尚古歌集(ミ)ニ

明日香能清御原乃宮尓天下
しらすやさよそとのやかめの下
所知食之八隅知之吾大王
きこしめすやすみしるわかおほきみの

高照(タカテラス)日之皇子何方尓
てらすらむ日かもとのみこいつくさそと
所念食可神風乃伊勢能國者
おもほしめしてか神かぜのいせの國は
奥津藻毛靡足波尓鹽気(シホケ)能義
おきつももなみたるなみにしほけのよし
あひもとほへるかもしかれこそ
香乎礼流國尓味凝文尓之
かをれる國に味(アヂ)こりあやにともの
あやにたふとき高照日之御子
たかてらす日之御子

藤原宮御宇

大津皇子薨後従伊勢(イセノ)齋宮上
京時御作歌二首

大來皇女(ヲホクノヒメミコ)

神風之伊勢(カムカゼノイセノ)能國尓毛有益平
かみかぜのいせの國にもあらましを

神風乃伊勢の国にも
こゝろハ歌意にいはん
おもひこし哀傷のあまり
ことによめる哥也
見まくほりわがせし
見まくほりわがせし
君ことゝ類聚万葉にハ
見まくほりこしとあるを古点
也　大來皇女ハ天武皇女
大津同母姉天武二年爲
斎宮朱鳥元年大津賜
死之年十一月皇女大來
還至京師日本紀卅巻
うつそみ乃ひとなる　空蟬之獨有吾世うとせしハ音通　ふとせこ同通を
この歌ハ我弟を云ふ同母の弟に別てうき弟を独ある我こゝろよ大津を葬
しけるのハ此二上山を兄弟とみんとゝいふ也世ハ弟世と云妹と兄との間の男ハ弟

なにしかもきけん君もあらなくに
奈何可來計武　君毛不在尓

見まくほりわがせし君もあらなくに
欲見吾爲君毛不在尓

なにしかもきけん馬つかるゝに
奈何可來計武馬疲尓

移葬大津ノ皇子屍於葛城二上山ニ
時哀傷御作ノ歌二首
大來皇女

うつそみの人なる吾や明日よりハ二上山を弟世とわが見ん
宇都曽見乃人尓有吾哉従明日者　二上山乎弟世登吾將見

なき兄とはなす常のよし
いそのうへにおふるつゝじ
心ハ明也祇目同時の哀
傷乃哥也此時大人の
よめる哥とも云也
万葉ニ此哥磯のうへとあり
岩乃上也此哥ハうつ
葬る時のことにハあらず
上京の時乃哥のよし
日並皇子　天武帝乃
皇子お二傳ス草壁の
皇子とも云し日本紀卅巻
あめつちのはじめの時
天地分れての初めを
神たちはかりて儲君と
あまてらす太子の

いそのうへにおふるあしびをたをらめど
磯之於尓生流馬醉木乎手折目杼

見すべき君がありといはなくに
令視倍吉君之在常不言尓

此一首今案不似移葬歌疑從伊勢神宮上京時感路上花作歌乎

日並皇子尊殯宮時作歌一首并短歌
日本紀ニ日持統天皇三年夏四月
癸未朔乙未皇太子草壁皇子
尊薨
柹本朝臣人麻呂

あめつちのはじめのときし久かたの
天地之初時之久堅之
あまのかはらにやほよろづちよろづ
天之河原尓八百万千万
かみのかむつどひつどひいまし
神之神集集座

貴さし事をいふ人とて
皇孫乃尊乃御前仁
中臣祓白八百万神等乎
神集仁集賜比神議仁
議賜天吾皇御孫乃尊
平波豊葦原乃水穂乃
國平安國登平介久所
知食止事依之奉幾
あやそ〳〵すひなめの
日並乃子こをも
あやまちをハ 天乃
ときろめせと神勅乃
あらそのみつなの
乃宴を我宝の如久
あめつちのあひの
天地乎答无久所
神分 而神分之時尓天照
日女之尊一云指上日女尊
ひなめの子こと
天平瀬 所知食
あやまちをもときろめさんと
原乃水穂之國平
らひらひ所知行
之依相之極
乃ありのりもち
神之尊等之八重撞
神下座奉之高照
別而一云天雲之重雲別而
座奴一云神乃子
日之皇子波飛鳥之浄
之宮尓神隨太布
座而天皇之敷座國等
天原石門平開神上
吾王皇子之尊天下
所知食世者春花之貴
等望月乃滿波之討武跡天
下四方之人乃大船之
思憑而天水仰而
待尓何方尓御念食可
無真弓乃岡尓宮柱太布
神分 而神分之時尓天照
日女之尊一云指上日女尊
ひなめの子こと
天平瀬 所知食 登寿
あやまちをもときろめさんと
原乃水穂之國平
らひらひ所知行
之依相之極
乃ありのりもち
神之尊等之八重撞
神下座奉之高照
別而一云天雲之重雲別而
座奴一云神乃子
日之皇子波飛鳥之浄
之宮尓神隨太布
座而天皇之敷座國等
天原石門平開神上
吾王皇子之尊天下
所知食世者春花之貴
等望月乃滿波之討武跡天
下四方之人乃大船之
思憑而天水仰而
待尓何方尓御念食可
無真弓乃岡尓宮柱太布
神のみこと日並の父帝天武の如く
神のみこと日並の父帝天武の如く
飛鳥浄御原宮に
あすのまつりごと
あすのまつりごと日並皇子尊
おふて
おかしてハきろむ
こうひ一首尾之已に
きて天下に王子これ
い神ながら隠り仕と
つそそも中臣祓に天乃八
重雲伊頭乃千別仁千
別天天降坐依之奉幾
こうひわりこと日並皇子尊
あすのまつりごと
飛鳥浄御原宮に
日並の父帝天武の如く
神のみこと

めさんと神の斗るやうは迄
いそとを用 神に比して云し
りんあり 日並の殂落（ソラク）を
云尚書帝乃殂落注殂ハ
是魂之升上落是魄之降
下也又云死鬼ハ為神也注略

ましてみありかを たかしりまして（座 御在香乎 高知座而）
あさことにみこととはせと ひつきの（明言尓 御言不御問 日月之）
あまたになりぬ そのゆへに みこの（數多成塗 其故 皇子之）
みやひと ゆくへしらずも 一云さす（宮人 行方不知毛 一云 刺）
たけの みこのみやひと ゆくへしらにして（竹之 皇子宮人 歸邊 不知尓為）

わかきみのみこのみことの
そも日並乃宮人等の
ならをなす心を云也 如く 儲君乃引に隠れあそて天下を知しめさば と
春花の貴からん 春花の香とうけて いふ 月のは みちたらんといはん
こそ くは皇子乃天下を知ろしめさば 可ともときこえかるらん世に満足くもて
せんと四方乃人々ひとつ形に仰（アフ）き待しと也 大船は形やしきおもれはたひとさ
のみといはん枕詞也 あまりのは あふきて待つらん枕詞 早に積（ツ）るごとき
ますみのそのに云在 は何方まで御思の座ふ大和を玉京玉乃岡は日並のみこ
乃廟にて亦こも 奥に今も人等働傷して総れるとあるに ように
ますみのあそも云まませ ハとこつみやくとのみやうりもとよめり廟にとのみね

する也 ある様なくしさよりて は みこれ陪廟也とつふは あまるかの集め やけて
ことはるはおもひのかなかにかくれさせまして なるをいへんとしてなり 此集に殯宮
みありか みやらうし とよらこみ 宮通 日本紀に御殿と書てみあらかと読
よりおりまして 中臣祓にも ありまして こゝにいる もひかまして陪殿
を領し知まるなど 明言（アケコト）は 毎朝也 皇子 けふくあまとさ いはね
ことにかれおかしまるを 問ねりあんを さるの殿をもて 日月かるるとは
そのうちにこのこゝやん まりしこて廟にありいまして 日月のあまれば 陪
まりこいとそすまも すて日月のまされ いぜんとしもまてこその くもの
そのうちに あさりゆくことし 此ある所のかなたの御みし 時とりにかわ
宮舎乃祚をうつ 中臣祓乃詞を用ひて まくみよ哀ありしこゝとこ
めてし吟味すへし 一云 ゆくへしらずも乃みこのとは ゆくへしらにの大君をつと
いふ所をし ゆくへしらにとは同別注

反歌

ひさかたの あめみるごとく あふぎみし みこのみかどの あれまくをしも（久堅乃 天見如 仰見之 皇子乃御門乃 荒巻惜毛）

久かたの あめみる
皇子の御門の あるると
ことからく 仰き見しを
ほし きみかども 輟するま

藍刺 日着雖照有
うねさす日之隠良久惜毛
渡月之
宮 鳥
鳴 池 放鳥
人目尓戀 而池尓潜
皇子尊宮舎人等慟傷作歌二十首

姓名未詳

高光る 我日 皇子乃萬 代尓
國所知 麻之嶋 宮裳毋
鴎 池有 放鳥
荒備勿行
君不座 十方
高光る 我日 皇子乃 伊座 世者
鴎 御門者 不荒有 益 平
外尓見 檀乃 岡毛 君座 者
常都 御門跡 侍宿 為 鴨
夢尓 谷 不見在之 物平 鬱悒

皇子乃廟乃とのゐする
をさひのくまとよめる也
とこつ御門ハ君の門を常
磐といふ也宮ハ御墓也
夢にだにみざりし 佐
檜乃隈太和る事也
廻をハこゝめぐりと云
皇子につかへて宮出す
ふるまひもなく夢にも
みるをみざりしものと

176 天地與共将終登念乍奉仕之情違奴
あめつちとともにをへむとおもひつゝつかへまつりしこゝろたがひぬ

177 朝日弖流佐太乃岡邊尓群居乍吾等哭涙息時毛無
あさひてるさだのをかべにむれゐつゝわがなくなみだやむときもなし

178 御立為之嶋乎見時庭多泉流涙止曽金鶴
みたちせししまをみるときにはたづみながるゝなみだとめぞかねつる

あめつちとともに
皇子と天地とともにと
祈ひしかくあへなくせし事をいかにと云也
あさ日てる佐太の　八雲御抄佐田乃をか太和ることそしられ佐太とよめるなり
へ一説日乃御のほとりにくもらしゝ事乃こゝを云也諸陵式に
みたちせし嶋をみる時　又安云みたちせしハ女乃御座に絶ゆる事也　和名

云潦音老雨水也　にはたづみハ庭乃たまり水ハ流るゝこといへん枕詞にそへし

179 橘之嶋宮尓者不飽鴨佐田乃岡邊尓侍宿為尓徃
たちばなのしまのみやにはあかねかもさだのをかべにとのゐしにゆく

180 御立為之嶋乎母家跡住鳥毛荒備勿行年替左右
みたちせししまをもいへとすむとりもあらびなゆきそとしかはるまで

181 御立為之嶋之荒礒乎今見者不生有之草生尓来鴨
みたちせししまのありそをいまみればおひざりしくさおひにけるかも

182 鳥埘立飼之鴈乃兒栖立去者檀岡尓飛反来年
とぐらたてかひしかりのこすだちなばまゆみのをかにとびかへりこね

183 吾御門千代常登婆尓将榮等念而有之吾志悲毛
わがみかどちよとことばにさかえむとおもひてありしわれしかなしも

鳴をとるとハ鳴のすかたに
橘の嶋のみやハ宮が
小嶋乃宮と同じのよし
皇子乃みかどにいかにあら
せざりければ宮にはあら
すみし離れて只居
給ぬ佐太乃岡のさぶらひ
すると云くなるを
みたちせし嶋をも
世をもし今見ればこ
ことなし果てたる
をとものへ人こそも見ゆ
こしちせし志か見れ
宮乃池の礒を嶋とも
より荒礒とよむ八雲

折ニ池なる礒よめりしこと
とりてそいひしならめ二
鳥栖ハ植をもちて畜ふを
すゑすなる房のこなす
いちゆへハ皇子の座所
甚すさみの飛つきふ流
の鳥に飛ゆかこ戸と之
かりそめも代々こことハな

おもひてありし わかこゝろかなしも
念而有之吾志悲毛

184
ひんかしの たきのみかとに さもらへと
東乃多藝能御門尓雖伺侍
きのふもけふも めすこともなし
昨日毛今日毛召言毛無

185
みつたての いそのうらみの いはつゝし
水傳磯乃浦廻乃石乍自
もくさくみちを またもみんかも
木丘開道乎又将見鴨
仙もくさく

吾御門ハ公今人ありて
皇子乃宮門をいふなるへし 主君乃門あれハ云也 吾一のハ助字
ひんかしのたきのみかと 又安云東乃瀧の御門ハ名に流門に瀧のおち
たる所也 東宮今人すのとのゐする所なる也 此事乃外ハ彼人丸此歌の前二
侍言といふも日月乃御かけにかくれにといふ心同心也へし可又公
みつたての いはのうらみ 水傳礒 又安云名所之 八雲抄ニ水傳の礒の浦紀伊
云ところも皇子乃庭乃池をいふ所のさま也のひしをよむ
なや 仙が云此句四句ハ左に於てうへのとしよりとこそくしさく

否をと和とへしらくさらくとハ志けくも玉東一つ門らくハこそこらく咲
さく咲時の之古点を下用て又ま本折ニ依て九条殿秋乃目此礒の備前
あまよ人ハ菊咲花に植やくなりとみえのかたりにこの歌もなしとく人ゆかり
木丘開をさくらとよむなりや 岩ふ乃ふへし
ひとひにハちたひまゐりし
皇子おはせし世ニハ志けく
まゐりし趣を今ハ今もわ
へも此つきふへし

186
ひとひにハ ちたひまゐりし ひんかしの
一日者千遍参入之東乃
おほきみかとを いりかてぬかも
大寸御門乎入不勝鴨

よしとちくさての
嶋ハ皇子乃古所也依太
ハ流底あるも今人あ
当所何ふかひるき殿
居されハよしもなくと云
こいかかハ当ふ時ハ
わかる君の浴のなかり
かかりかるへき也

187
つれもなき さたのをかへに かへりゐは
所由無佐太乃岡邊尓反居者
しまのみはしに たれかすまはん
嶋御橋尓誰加住舞無

188
あさくもり ひのいりゆけは みたゝしの
旦覆日之入去者御立之
しまにおりゐて なけきつるかも
嶋尓下座而嘆鶴鴨

189
あさひてる しまのみかとに おほゝしく
旦日照嶋乃御門尓欝悒
ひとおともせねは まうらかなしも
人音毛不為者真浦悲毛

真木柱太心者有之香椅
まきばしらふとこころはありとかも
鎮目金津毛
此吾心鎮めかねつも
毛許呂裳遠春冬設辛荷之
けころもをはるふゆまけし
宇陀乃大野者所念武鴨
うだのおほのはおもほえむかも
朝日照佐太乃岡邊尓鳴鳥之
あさひてるさだのをかへにとりのなく
夜鳴變之布仙而布与此辛已呂乎
よなきかへさふにしきのごろを
八多籠良我夜晝不云行路宇
やたごらがよるひるといはずゆくらむを
吾者皆悲叙爲
あれはみなかなしみぞする
右安貴王歌一首并短歌
右安貴王、歌一首并短歌

「かけまくも皇太子尊の山野に御遊びしたまへる時の歌二首
反歌二首 佐太の岡邊 佐太乃岡邊 雪莫零 雪な降りそ 山野に御遊びしたまへる時 山野尓御遊之給時
明日香河 明日香川 川淀不去 川淀去らず 立霧乃 立つ霧の
如此所見欲 かくし見まくほしき 吾大王鴨 我が大君かも
神岳乃 神岳の 山之黄葉 山の黄葉を
今日乃雨尓 今日の雨に 落香過奈牟 散りか過ぎなむ
右、冬十月、幸于紀伊國之時、坂上忌寸人長、従駕作歌
右、冬十月、幸于紀伊國之時、坂上忌寸人長、従駕作歌
泊瀬部皇女忍坂部皇女歌一首并短歌
泊瀬部皇女忍坂部皇女并二
天武天皇 或云葉河嶋皇女歌也
天武天皇、或云、葉河嶋皇女歌也
泊瀬部皇女 忍坂部皇女
泊瀬部皇女、忍坂部皇女、
川嶋皇子 越智野時獻
川嶋皇子、越智野時獻
天智天皇之
天智天皇の
御子等持
御子等持
淨大參 天武天皇 朝
淨大參、天武天皇、朝
乃爵位十二階之内
乃爵位十二階之内
第二階 淨大參
第二階、淨大參、
泊瀬部皇子 川嶋皇子
泊瀬部皇子、川嶋皇子、
天智天皇之
天智天皇の
御子等持
御子等持
日本紀曰 朱鳥五年辛卯秋九月
日本紀曰、朱鳥五年辛卯秋九月、

統天皇の未多五年
正月增封為百戸
日本紀卅巻
已巳朔丁丑浄大
参皇子川島薨

柿本朝臣人麻呂

飛鳥　明日香乃河之　上つ瀬尓
生　玉藻者　下つ瀬尓流　觸経
玉藻成　彼依　此依　靡相
之　嬬乃　多田名　附　柔
尚平　於身副　寐　夜床　荒
不藻者　馬玉乃　何乳　赤引
敷藻相　屋一常　念而　公毛
草枕　旅宿鴨　為留　不相君故
玉衾　乃　且　露尓
玉裳者　泥打　久霧尓　衣者沾
越乃野　過　去
赤　毛　勝　相　八方

反歌

敷妙　乃　袖易之　君　王　寐
越乃野　笹　分　神　雨
千　知野尓　過而
一云

玉衾　乃　越乃大野之　露尓
玉裳者　泥打　久霧尓　衣者沾
草枕　旅宿鴨　為留　不相君故

敷藻相　屋一常　念而　公毛
越智野　過　去
赤　毛　勝　相　八方

めにとのまなくしなされのハ浦藻となびかくこすれ大野ゞをいへん枕詞
也イきち野ハ藻乃緒となへしやや　玉藻も玉裳といひもろともにせん乃皇女
裳をひちぬらしかゝすをとことひつちハひきしこいちといふにひあし
きまさる乃袖なへし君　夜母ハ枕の下にも袖まくらにもいふ只ちうて見と
袖なへしとハ袖うちかへしとし見と皇女と袖ひきかへしいひかへる川嶋皇子を
君とふとこすに野をとゝるへしハ葬をうつしてをきとるかくせて見と一云をとち
野にも同じ大和同名にもと
木瓶(ジヤウクハウジ)大和也皇子乃宮なり
浄廣肆　ぞとし天武
帝乃時十二階乃
爵位乃うちに

こよひかりあすか乃
此詞も下乃玉藻も
みな結れハせる川藻
とらう枯れハせるなりと

明日(アス)香皇女(カノヒメミコ)木瓶(コガメノ)殯宮(モガリノミヤ)時作歌(ル)一首
并短歌　文武天皇四年夏四月癸
未浄廣肆明日香皇女薨天智天皇
之皇
女也

柿本朝臣人麻呂

飛鳥　明日香乃河之上瀬
とぶとり乃あすかのかハのかみつせに
石橋　一云石浪　渡　下瀬
いしはし一云いしなみわたししもつせに

万二下　卅二

いはんとて張わたし
うち橋わたし　拡とうち
わたさは橋と　ちの山
にも乃山にも浮すもと
みかゝるをするゝせるゝす
をするとと云也
川藻しく川乃藻也
玉藻もともに枯れ
いせる小皇女ハまさ
ひとへてよくぬるを也
吾わきみのあわれハ
あすのの皇女乃ことを
立まさりまいれハとこ
ろあせハ見安云ころび
わらし　倚宮　倚白ころと
云ハころひをと云詞也川

打橋渡　石橋　一云石浪
うちはしわたし一云いしなみ
生靡留　玉藻毛叙　絶者生流
おひなびけるたまもぞたゆれはおふる
打橋　生乎為礼流　川藻毛叙
うちはしにおひををれるかはもぞ
干者波由流　何然毛　吾王
かるれはゆるなにしかもわかおほきみの
乃立者　玉藻之如　許呂
たたせはたまものごとくころ
臥者　川藻之如久　靡相之
ふせはかはものごとくなびかひし
宜　君之朝宮乎　忘賜哉
よろしききみがあさみやをわすれたまふや
夕宮乎　背賜哉　宇都曽臣跡
ゆふみやをそむきたまふやうつそみと
念之時　春部者　花折挿頭
おもひしときのはるべははなをりかざし
秋立者　黄葉挿頭　敷妙之
あきたてはもみちばかざししきたへの

藻のことくなひかひし
こゝろよりそひたるなひし
ところなり
朝宮をわすれ給ふや 夕宮を背き
朝夕宮ハ殯宮にて申せ
ぬるやといへるとそとし
うつそみ 現身と皇女
の在世の時を云
鏡なす 見るの枕詞
もち月 益珍の枕詞
もち月ハ満る月なれハめつらし
君と時々 清て讀む 出
ませ 遊ひ給ひての意
みけむかふ きのへ(毛)(イキ)
瓶ハ酒樽也 盛器也 御
膳の具なりといへる

袖携 鏡成 雖見不厭
そてたつさはり かゝみなす みれともあかす
三五月之 益目頰染 所念之
もちつきの いやめつらしみ おもほしし
君與時々 幸而 遊賜之
きみとときとき いてまして あそひたまひし
御食向 木瓲之宮乎 常宮跡 定賜
みけむかふ きのへのみやを とこみやと さためたまひて
味澤相 目辭毛絶奴 然有鴨 綾尓憐
あちさはふ めことも たえぬ しかれかも あやにかなしみ
一云所已乎之毛（一云 そこをしも）
宿見鳥之 片戀嬬 一云為乍
ぬえとりの かたこひつま 一云しつゝ
朝鳥 往來為君之 夏草 念之萎而
あさとりの かよはすきみか なつくさの おもひしなえて
一云朝霧
夕星之 彼往
ゆふつゝの かゆき

おもハれハ木瓶をいハん
とて御食向とつゝけたり
ところ也 殯宮をもいふ
りなるも 奥城も城上
乃ことなとそこなとそ
あちさはふ 味澤相 未詳
云つちくらへ 重ぬ 甘キ
と甘き知辛をも辛き知るハ
味なれハ味の枕詞
御食向木瓶乃ことゝい
しるは味にさはふまこ
とも絶ねとよみて今
皇女うせ給ひて物ものたまはすと云日本紀ニまことゝ問と同意
しのひ給ふらむもあやにあや
ゆくさきハ叮二字いよみて思しけり
ぬえ鳥のうらなけ

此去 かくゆき 大船 おほふねの 猶豫不定見者 たゆたふみれは
遣悶 情毛不有 なくさもる こゝろもあらす
其故 為便知之也 そこゆゑに すへしらにや
音耳毛 名耳毛不絶 おとのみも なのみもたえす
天地之 弥遠長 あめつちの いやとほなかく
思將往 御名尓懸世流 しのひゆかむ みなにかゝせる
明日香河 及万代 あすかかは よろつよまてに
早布屋師 吾王乃 はしきやし わかおほきみの
形見何此焉 かたみにこゝを

よむ者小ぬ〳〵こゑうるさゝをれハとを数多のハりくりしい〳〵とゝいふん松明
こゝの高ぬよとしつゝしい〳〵そもちゝとゝいひかけて女等まのなりひきてと
ほくそゝ女まい嗚呼ゝきりゝをうてゝくこひしたよとをもひよ
ひい〳〵そも皆皇女をとりまくゝ〳〵思ひきりまいハあやかりゝうく
こひとゝきと皇女もいおりゝきねいとひきりくゝそのゝ
夕ほく和名云大白星一名長庚暮見於西方為長庚此間ニウツ、云ふ
夕ゝきりゝ西よ出さゝ句ふ星をれいハかゝきりゝ〳〵ゆきてゝいふん松明を垂
天船乃ごとゆきふのすいかりの舟とゆきくりゝてりをそる物心
こゝろいのをと思ひなれすゝおふ恋つゝのすいとゝいつゝふ同一頭心
すゝもきゝ〳〵やゝ乃字ほゝてゝもゝ〳〵すゝもきんやゝこゝ枝のすゝも
きゝとゝりゝそゝの子ゝ名のみゝし給をとゝいふ寺も名ゝ皆給さると
ゝゝ名聲をくゝきゝ名のさきゝこゝをゝ西のきゝこゝをゝ死ほの衾ゝをゝ
ゝめぬちゝ乃天地ゝ長久ゝる物をれいハ松明をきゝくゝ山おすゝ乃皇女
乃陵ゝを泣きくゝもゝくゝ声ゝ高ぬるをゝゝそのゝんいハ泣ゝ
神名ゝ無せる皇女乃陵名とおすゝとゝゝ
そゝきやゝ〳〵そゝきりゝと同やゝこゝとゝ泣ゝ高通神津物云ゝ

葉物云そゝきりゝと八帝乃ゝとゝ〳〵人乃ゝおゝるとゝ〳〵今衆ゝ
朝参ゝこゝをくゝそゝきりゝとゝとゝそれハ云なゝりゝとゝ神ゝお皇衆方
代ゝをくゝにそゝきやゝ〳〵とゝ吾ゝおゝきゝそれハ云なゝりゝとゝ死ほの衾ゝをゝ
ゝめぬちゝ乃皇女乃陵名のおすゝ乃川ゝ

反歌イ短歌二首

明日香川 四我良麻 渕 之 墓 益 者
ゝすゝの川ゝ乃ゝきゝよわりゝせゝやゝせゝ
ゝ
進留水 母 能 村尓絶有 萬思
おゝもゝふゝ乃ゝ乃ゝふりゝぬゝ乃ゝ
一云 水乃 与 抒尓加 有 乃 益
ゝ乃ゝ乃ゝおゝ乃ゝ

明日香川 明日 谷 一云 左倍 将見 等
あすゝ川ゝすゝふゝ
念 香毛 吾 王
ゝんこと
念 八方 忘
なりゝやゝも一云ゝゝわりゝおゝ
御名
乃ゝ名わすれぜぬ 世奴 一云 御名不所忘
皇女乃陵名の云ゝれねゝ
山陵名乃ゝをゝゝおゝもゝすゝも行ゝつゝそゝもゝんと云ゝつゝ念 方 定家の哥 田 仙

かけまくもゆゝしきかも
かけていふも忌りきこと
いはまくもかしこき あやにく
におそれ多く申すことゝ
まかみがはら 八雲抄に大和
とあり日本紀廿一蘇我馬
子始作法興寺此地名飛
飛鳥真神原亦名有故
久かたのあまつみかどを
八雲抄に天乃みかどはき
しきとあり 天の
久遠なるをいふにて天皇
門は天武天皇乃内裏をさし
貴みていふ 飛鳥清見
原宮也 かしこくも
原にさだめ給ひし

高市皇子尊城上殯宮之時作歌一首 并短歌 日本紀曰持統天皇十年丙申秋七月辛丑朔庚戌後皇子尊薨

柿本朝臣人麻呂

かけまくも 掛文 ゆゆしきかも 忌之伎鴨 一云 ゆゆしけれども 由遊之計礼杼母
いはまくも 言久母 あやにかしこき 綾尓畏伎 あすかの 明日香乃
まかみのはらに 真神之原尓 ひさかたの 久堅能 あまつみかどを 天都御門乎
かしこくも 懼母 さだめたまひて 定賜而 かむさぶと 神佐扶跡
いはがくれます 磐隠座 やすみしし 八隅知之 わがおほきみの 吾大王乃
きこしめす 所聞見為 そとものくにの 背友乃國之 まきたつ 真木立
ふはやまこえて 不破山越而 こまつるぎ 狛剣
わざみがはらの 和射見我原乃 かりみやに 行宮尓 あもりいまして 安母理座而 あめのした 天下 をさめたまひ 治賜
一云 はらひたまひて 掃賜而 をすくにを 食國乎 さだめたまふと 定賜等
とりがなく 鶏之鳴 あづまのくにの 吾妻乃國之 みいくさを 御軍士乎 めしたまひて 喚賜而
ちはやぶる 千磐破 ひとをやはせと 人乎和為跡 まつろはぬ 不奉仕 くにををさめと 國乎治跡 一云 はらへとて 掃部等

神さみしていはかくれます
神さひ坐ますなり 岩かくれます
きこしめす 聞見為也
そとものくに 背友乃國也と同じ
うしろの方 外國とも
こゝろへ方の国にて日本紀
小山田などの乃
みちと云ふ別のうちに
まき立つる不破山 藤原
の真木立つるの山也
こゝにもとよりこまつるぎわさみのはらの
しておのれの心は彼大伴皇子乃謀害乃心をしり給ふの兵をあつめたまふ
よりて天武天皇吉野の宮をいでゝ東国よりせめのぼりたまはんとする時
高市皇子の奏言によりて不破に入せ給ひわざみがはらにおはしましけり
日本紀廿八日丁亥高市皇子遣使於桑名郡家以奏言遠居御所
行政不便宜御近所即日天皇留皇后而入不破又戊子天皇往和

躬撿挍軍事而還己丑天皇往和蹔命高市皇子號令軍衆このとき
高市皇子わかみこにおはしましけり
こまにしきさわざみ　仙曰高麗乃にしきはにしきにてあそびしわざ
わざすけるれはかくつけたり　宗記云ハ高麗人の錦ハ錦なるゆゑにとく
かりやにやすらひまして　行宮とてかりにつくる御所にやす
らひまして　いやとおはしまして　しばらくここに休ませますを
おさめのかしこき　御宮をおさめますいはるはのみことのりすれて
そうして　又安云　食國　帝王乃しろしめす國をいふ　美濃尾張乃軍兵
あつめおく　此むのみいくさをあつめて
をさめしたまふ事也　日本紀廿八曰先遣高市皇子於不破令
監軍事遣山背部小田安斗連阿加布發東海軍又遣稚櫻
部臣五百瀬土師連馬手發東山軍　とりのなく　[illegible]
袖中抄云玄中記曰東南有桃都山上有大樹曰桃都枝相去三千里上有
天鶏日初出照此木天鶏即鳴天下鶏皆隨之鳴　東南のてらす
てらすとて下乃あるゆゑあつまと　いふ東西を　あつまに
こそり給へるハ日本武尊の[illegible]を[illegible]ふゆゑなり

岩ありのかたりて東南乃方をのぞみて吾嬬者耶とのたまふ故な山の
東乃諸國を吾妻とのたまふ　吾嬬國といふ　略注日本紀七云吾妻の里とて上野に在
ちとやまと人をおもうしとやまとのね　仙曰人乃字かみとよむ（まこ）日本記云
使爲化人号國常立尊　和せとは和乃字也　和順せしめるとハ御字
しまつろはぬハ日本紀ニ不順と書りハ　不奉仕と書きたるに
はしくさきたる[illegible]　まつろはぬ
わかみことのまにまに　皇子由河すめらみこと隨任賜者　大御身爾
由河ハすめらみことのまにまにといふ　わかみこと乃まにまにおほみ御身に
このいくさ[illegible]　太刀取帶之
ハ高市皇子武勇剛毅　大刀とりおはしおほみ手に弓取持之
にましまして兵機をとり　大御手尓弓取持之
礼法をつかひしらしめ　御軍士乎安騰毛比賜　齊流
あつめたまふ　鼓之音者雷之聲登聞麻低
天武高市に軍事をあづけ　吹響流小角乃音毋一云笛乃音波
擧げ給ひつゝあり　敵見有虎可叫吼登諸人之
日本紀廿八曰天皇謂高　恊流麻低尓　一云聞或麻低

市皇子曰其近江朝庭右大臣及智謀群臣共定議今朕無與計事者唯有幼小孺子耳奈之何皇子攘臂按劒奏言近江群臣雖多何敢逆天皇之靈哉天皇雖獨則臣高市頼神祇之靈請天皇之命引率諸將而征討豈有距乎爰天皇誉之携手撫背曰慎不可怠因賜鞍馬悉授軍事則還和蹔

指擧有　幡之靡者
さゝげたる はたのなびきは
冬木成　春去来者　野毎　著而有火
ふゆごもり はるさりくれば のごとに つきてある火
一云　冬木成　春野焼　火乃　風之共
乃一云 ふゆごもり 春野やく火の かぜのむた
靡如久
なびくごとく

おほみまへ 又安云所身し 大刀らかえし 弟くし 大刀たちとき 抜き持ち
ゆきとゆきつゝ 偕曰 ゆきとゆきつゝ 玉篇 師説 おとをいつはりて
そのよるべのまへ 偕九はかりの 鼓をうつ 時の成やかとお
もひ 告侵てそのうるはしきこと 采葉云凡軍家如雷霆如風雲云
のきこゆる小角の 角ハ軍器也胡国乃えびす 笛をゆらし 中国のうる
をきこしめしてより黄帝出これと てふ 角を吹く 竜鳴なる
てふくるなり 日本紀廿九曰天武天皇十四年十一月 詔四方國

大角小角　和名云兼名苑云角本出胡中或云出呉越以象龍吟也大角ハラノフエ小角クダノフエ
ふくする 又奥云おほつゝみ 玉篇云 鼓 ゆゑ玉篇云 さこえ なりといふ 小角
そのへいのおひゆる 背流 采葉云此剳乃ころ唐乃兵 棒を出して 鎗を
手にして 孫子曰夫鼙鼓金鐸所以威耳旌旗毛幟所以威目 に
風乃むきに ひくゝ 野火の風とともになびくごとくと
伊まきわたると 恐

取持流　弓波受乃　騒
とりもてる ゆはずのさわき
三雪落　冬乃林尒
みゆきふる ふゆのはやしに
一云　由布乃林
一云 ゆふのはやし
飄可毛　伊巻渡等　念麻弖
つむじかも いまきわたると おもふまで
聞之恐久
きゝのかしこく
諸人　見惑麻弖尒
もろ人の みまどふまでに
引放　箭乃繁計久
ひきはなつ やのしげけく
大雪乃　乱而来礼
おほゆきの みだれてきたれ
一云　霰成　曽知余利久乱者
一云 あられなす そちよりくれば

乃うへハ雪林の風に随ふうし伊まきわたると
きこえしるく 矢さけびの声にみな恐るゝ
一云 諸人の見惑とぞいふ
弓をかまへて嵐のちかき
わたるを又惑とみて
さけび出て 成くし

不奉仕立向之毛露之消者消倍久去烏乃相競
志乎乃気伊気奴久遊久母乃
端爾朝霜之消者消言加牟蜉
等母良藻布佐之尓渡會乃齋宮從伊吹
神風尓伊吹惑之天雲平
日之目毛不令見常闇尓覆
賜而定之水穂之國平
神隨大敷座而八隅知之
吾大王之天下申乎
賜者萬代然之毛將有登一云
如是毛安良無等木綿花乃榮時尓
吾大王皇子之御門乎
神宮尓裝束奉而遣
侯御門之人毛白妙乃麻
衣着垣安乃御門之原尓
赤根刺日之盡鹿自物
伊波比伏管為玉能暮尓至者
大殿乎振放見乍鵾成
伊波比廻雖侍候
不得者春鳥之佐麻欲比奴礼者嘆
神名秘書曰度會郡者大
国玉神奉迎之時以持
乃為橋度焉矣大国玉
神依之良姫奈來迎
相継橋置本村自本度
會焉岡以為名也
いつきのみやはしらの
伊加麻志ましし天皇
と吹とりて伊加志
し天皇乃威神力皇子
軍功おく近江の諸軍
を退治ことむけ
詔し日本紀を第一
天武天皇吉野宮に
ましし
乃ちて軍士を召んと
伊勢乃国

ふなりて軍士あまた
もろともに朝明郡迹大
川を渡るに天照大
神を拝みまつらむと
するに其の後ろめたき
ことを叶ひたまはず
依りて退還を用ゐず
ほ神明の加護をこひ
ねがはむ
日本國を神のまにまに
治めたまふべきや
否や
又安云木綿花こそ
今のごとく高市乃
御門の御世に
始まりけれ
万葉集
又安云木綿花こそ
今のごとく高市乃
御門の御世に
始まりけれ
彼時門人
答へて曰く
雖然
吾大王之
所念食而
作良志
香來山之
宮万代爾
過牟跡
念
哉

未盡
過尓憾
若言右歟
百濟之原從神
座而朝毛吉
木上乃宮乎
常宮等高
奉而神
隨安定
座奴

日乃旦今日
もいひしごとく鹿自物
をいのりて伏すに鹿
うつくしき伴ひ助
おそく暮自物こつるこひ
うつくしき
ものなれば
彼時門人
答へて曰く
雖然
吾大王之
所念食而
作良志
香來山之
宮万代爾
過牟跡
念
哉

万代爾
過牟跡
念
哉

[illegible]ㇾ悼乃御一體乎
叫くしの乃子や 栗藁云
香具山宮ハ藤原宮御
宇天皇持統乃離宮
ところ
よりのたまふもんと
叫くしの乃まハ万葉も
ころ〳〵ところ
吐て与のくりこれも
おうれなるべくしの
まと天乃如く作きこ
をくる市なる乃歎嘆を懐思んそ
なつくる乃あめ尓和
仙坊裏書云あめよきるくと云ハ死て天尓上る
と云ん 万葉
云家ハあめ尓去ぬるくと和名抄尓の
そ尓やとも乃地の坑
かくれぬ乃ハ
天之如 振放 見乍 玉手次
懸而 将偲 恐有 騰文
かけくきのくんかしこくれも

反歌一短歌二首

久堅之天 所知定君 故尓
久くる乃あめ尓きくへる
日月毛 不知 渡鴨
日月もきこいわる
雄 安 乃 池之堤之 隠沼乃
そ尓やとも乃地乃
去方手 不知 舎人者 迷惑
くるとそ

仙坊裏書云あめよきるくと云ハ死て天尓上る
と云ん 万葉
云家ハあめ尓去ぬるくと和名抄尓の
そ尓やとも乃地の坑
かくれぬ乃ハ 仙坊雄安ハ大和よあり 沼とい末乃流ねとハ
かくれぬ乃ハ

今人ハ尓ほこい尓きて泊門ともれ今の事ともしらいえ
ねハ学れさるものいわれいと云ハ空言ハ
なきこと乃ともハ

偖哭沢乃森紀伊
也ことハ頃ころる日も
れぬハ尓ほあるかた
おとひしのの如
不安云る日れぬ人
乃死ねるハ天命こそ
天尓知くくと云 万葉
辛ぬるや初つる
叫くしの皇子尊乃魂帰
渓漠くりと歌心
但馬皇女 天武皇女 妃大
職冠女穂積親王姉
穂積 天武皇子 知太政

哭 澤之 神社尓 三輪須恵 雖禱祈
あをさくさ乃かひもなく
我王 者 高日 所知
わかおほきみハ日も

此一首類聚歌林曰檜隈女王 怨
泣澤神社歌也

但馬皇女薨後冬雪日遥望御墓
悲傷御歌一首

穂積皇子

零雪者 安播尓 勿落 吉隠 之
雪こそにおちりそことの
猪養乃岡 之 塞 為巻 尓
ねくのとのせきこよせまく

車 母穂我(ホガ)大兄大臣女

弓削皇子薨時歌一首并短歌 文

七月癸酉淨廣(キヨミ)武天皇三年秋

貳(ニ)弓削皇子薨(カムサリ)

置始東人

高光(タカヒカル)

安見(ヤスミ)知之(シシ)吾王(ワガオホキミ)

やすみしる わがおほきみの

日之皇子(ヒノミコ)久堅(ヒサカタ)乃天(アメ)

すめろきの ひさかたの あめの

宮尓(ミヤニ)神隨(カムナガラ)神等座者(カミトイマセバ)其(ソ)

みやに かむながら かみといまさば そ

乎霜(ヲシモ)文尓(アヤニ)恐美(カシコミ)

を しも あやに かしこみ

隱口(コモリク)日

こもりく ひ

畫波毛(ヒルハモ)夜之盡(ヨルノコト)

るは も よるの こと

羽毛(ハモ)夜之盡(ヨルノコト)

はも よるの こと

卧(フセ)居(ヰ)嘆(ナゲ)

ふせい なげ

雖嘆(ナゲケド)不足(タラヒ)香嘗(カヒ)

けど たらひ かひ

反歌

乃(ノ)乎(ヲ)

の を

天宮(アメミヤ)乎神(ヲカミ)乃(ノ)貢(タテ)尓(マツル)

あめみやを かみの たてまつる

天宮ヲ神伎(カミワザ)のまに神

二成(ナス)而(テ)奉(マツル)

にして まつる

之(シ)

の

涙(ナミダ)

なみだ

漠(ソ)漠(ソ)

そ そ

流(ナガル)

なが

之(シ)

の

曾(ソ)毛(モ)

そも

魂(タマ)

たま

者(ハ)

は

無(ナシ)

なし

可(カ)

か

久(ク)

く

おおきみは かみにしませば あまくもの

王者神尓座者天雲之

いかづちの うへにいほらす

五百重之(イホヘノ)下尓(シタニ)隱(カクリ)賜(タマフ)

神樂波之(カグラハシ)志賀左(シガサ)射礼浪(レナミ)敷(シキ)

かぐらはし しがさ れなみ しき

常卅(トコミ)跡(アト)君之(キミノ)坊(ボウ)念(ネン)有(アル)計類(ケダモ)

とこみ あと きみの ぼう ねん ある けだも

妻死後(メシノチ)泣血哀慟作(ナキチアイドウツクル)歌二首并短

歌

檜本朝臣人麻呂

天飛也(アマトブヤ)輕(カル)

あまとぶや かる

跡(アト)者(ハ)吾妹兒之(ワギモコノ)

とは わぎもこの

里尓(サトニ)有者(アレバ)懃(ネモコロ)

さとに あれば ねもころ

欲見(ミマクホシ)

みまくほし

騰(アガリ)不(エ)已(ズ)

あがり え ず

行者(ユクハ)人目(ヒトメ)多見(オホミ)

ゆくは ひとめ おほみ

真根久(マネクノ)徃者(ユクハ)人(ヒト)應(ベシ)知(シル)

まねく ゆくは ひと べし しる

狹根葛(サネカヅラ)

さねかづら

後毛 將相等 大船 思
らのちもなろうんと おもひ
懸 而 玉靖 磐垣 淵之
まもりくみろうみのいそかまくらの
隱 耳 戀 管 在尓 度 月乃
かそれのみこひつゝあるふわるる日の
晩 去之如 照 月乃 雲隱如
それゆくごとくてる月乃 雲かくるごと
奥津藻之 名延之 妹者 黃葉乃
おもろのまもよりねしとわれもろを
過 伊去等 玉梓 之使之言者
すぎてくゆくと おほせれば 使のいへる
梓弓 聲尓 聞而 壹 再聞而
あづさゆみ こえをきゝつゝ 一云きくのみに
將言 爲便 世武 爲便 不知尓
いふすべも しらにと

かけろふの もゆる心 かけろふは ほのかに 炎立 春の字を 古人は 書たれども
あれは かげろふの 字なれども 或は しゆんしゅつ 或は 陽炎 と 古事記 履中天皇
時の 歌にも 春日を 炎春日 と よめる 春天の 陽炎 の 如く 夕死 巨略 蜻蛉 の
こゝかしこと よろぼひ 別れ 惑ひ 去れて 男女 一所に 居ざる 心を 陽炎の
乃如 もえ 立の 渕 と 詠れ 岩垣淵 と いへる 心 思ひ 隱れの こと 也 こゝの 心
わする 見 それ ゆゑ こと 多 うせ ても 人 に 知 られ ず 思ひ 死 に 死 ぬる
こと を いふ 也 おもひ しの 妹 にも 逢 ず 思ひ 死 に 死 ぬる 人 の 魂 は
いく 倍 ぞ おもひ しの 妹 にも 逢 ず 思ひ 死 に 死 ぬる 人 の 魂 は
なつさふ 鳥 の 音 の 如 く 泣 つゝ 來 ん と 也 なつさふ 鳥 は 水鳥 の 惣名 也
聲 耳 聞 而 有 不得者 一云名 乎 聞 而 有 不得者 吾 戀 千重之
まなくきくなかねわれこひのちへの
一隔 毛 遣悶流 情 毛 有 八
ひとへにも なぐさむる こころも あれや
等 吾 妹子之 不止 由 見 之
と わぎもこの やまずと 見 しの
轉 寸 尓 吾 立 聞 著 玉
まろび 寸 に わが 立 聞 に 著 く 玉

手次 歌火久山尓 喧鳥之
とすきうねひの山よ なくとりの
音毋不所聞 玉鉾 道行人毛
なくもさそ をちこちを もとおちこの
獨谷 似之 不去者 為便平無
ひとりこ ゆかは すへをなみ
見妹之名喚而 袖曽振 鶴
そもくなくも ひとりかける 神うみかける

反歌

秋山之 黄葉平茂 迷流
秋山の もみちをしけみ まとひぬる
妹乎将求 山道不知毋
いもをしもとめん 山路しらすも
一云 路不知而 宝珠乃
黄葉之 落奈倍尓 玉桙之
もみちをしけみ ちりゆくなへに
使平見者 相月夜 所念
使を見れは おもひ月夜 おもほゆ

打蟬等 念之 一云 宇都曽臣等 念有之
うちせみと おもひしを なおもひ
時尓成 而 持 吾二人見
時尓成 而 持 吾二人見
之 趨出之堤尓 立有
しはりいての つつみにたてる
槻木之 已知葉乃 茂之春
槻木之 已知葉乃 茂之春
来者 雖有 憑有之 兒等尓者
来者 雖有 憑有之 兒等尓者
妹乎 雖有 世間平 背之不得者
妹乎 雖有 世間平 背之不得者
あれとよれる をそうきしえねは
あれとよれる をそうきしえねは
蜻火之 燎流荒野尓 白妙之
かけろふの もゆる野尓 白妙の

天領中 隠 鳥 自物 朝 立
うまひ手こゝろ 乎 多 ゝ 者 石
伊麻之丘 人日成 隠 去之鹿歯
吾妹子之 形見尓 置有 若 兒乃
乞泣 毎 取 與 物之
無 者 鳥穂 自物之脇 挟 持
吾 妹子與 二人 吾宿之 枕付
嬬屋之内尓 晝羽 裳 浦 不樂
晩之 夜者 裳氣 衝 明
嘆 友 世武 為便 不知尓 戀 友
相因乎無見 大鳥 羽易乃山爾
吾戀流 妹者伊座 等 人之云者石
根左久見乎 名積 来之吉 雲 曽
無寸 打 蟬等 念之 妹之珠
蜻 髣髴 不見 思者
髪谷 裳 不見

山小妹 安 人乃 八十乎 有 可 山 淵乎
有 乃 物 可 妹 等 言 手
云 可 一人 九 乃 高 乎 或
一云 多都曽臣等 念之時 携 手

吾二見之出立百兄槻ノ并木
わりそりかくり出そそるそそえ槻のま
虚知期知尓枝剌有如春葉茂
こちふ枝さそるそと
妣妹庭雖在
念有之
まの妻の妻
妹庭雖在
特有之世中背
妹ないおれと
不得者香切火之燎流荒
野爾白骨天領ル隠
物朝立伊行而八日成隠
西加婆吾妹子之形見爾置流
緑兒之乞哭取委
物之無者男自物腋挟
持吾琢子與二吾宿之枕附
孀屋内尓旦者浦不怜晩之夜
者息衛明之雖喫為便不知
雖戀相縁無大鳥
羽易山爾汝戀妹座等
云者石根割見而奈積來之
雲叙無宇都曽臣忩之
妹我灰成而座者
去年見而之秋乃月夜者雖照

反歌

こそえて秋乃月夜ハてせ

妹子一月八日照世と
し妹八泳年詠て
さりて妹ゝ人
九集拾遺集ニ秋の
月ハ有れとも
妹八やをさりとも
ゝすゝちとひまくの山ゝ
乙女山とゝもりの
うもゝ名ゝ
ゝ年八会道をりとて
そしゝ八中物ゝ
おゝ明玉集ニ
ゝゝゝゝ会ゝの川
ゝの山ゝゝゝ
ゝ
日

相見之妹者弥年経と放
一云ゝゝゝ去年見而之秋、月夜者雖度
相見之妹者益年
離
会道平引千乃山尓妹平置而
山徑徙者生跡毛無
会路引出山妹置
山路念迹生乃毛無
来而吾屋平見者玉床之
外向とまさ来
妹ゝ木枕

吉備津采女死時作歌一首并短歌
キヒツノ乃子メニシテ

柿本朝臣人麻呂

秋山下部留妹奈用ゆ竹乃騰遠
秋山乃ゝ
依子等者何方尓念居可
拷紐之長余平露已曽寝
朝尓置而夕者消
等言霧已曽滋夕立而明
者失等言拝弓音
聞吾毋髣髴見之事悔
敷平布栲乃手枕纏
而劔刀身二副寐價牟
ゝゝゝゝ

茅草 其嬬 わが妻も 子者 不怜 かくこひ 弥 悔 さひ
孤可念 布寐良武
みつつおらむ 念戀良武 時 遥去 不在 ねむ
なひとりかも 子等我 朝露乃 如也 夕霧乃 如也
こころの 鬱悒 夕霧の 如也

反歌

樂浪 志我津 子等何 一云 志我乃 しがの
麗まち 道 之 川瀬 見 道
ゆくみちの川瀬乃みちを 又 見 者 不怜 毛 定 見 人 乃 待 知 世 の
みちをまたれは

天數 飛 津之子 相 月於 日 於
うつせみを 凡 のひとの 保尓見 數 者 今 叙 悔
おろかのわれは 万呼の 悔 しきかも

仙日本紀三讃吉と云皆
日本紀三讃吉と云皆
讃岐狹峯嶋視石窟中死人作歌一首
并短歌

柳本朝臣人麻呂

玉藻吉 讃岐國者 國柄加 雖見 不飽 神柄加 幾許

しかるに天地日月を云
神乃御面とは次下云る
を讃岐をいふ 古事記云
生伊豫之二名嶋 此嶋者身一而
有四面 毎面有名 伊豫國
謂愛比賣 讃岐國謂
飯依比古 下略 四国の一也
つきてくるハつゝき来る也
中乃みなと 仙曰河波云
中湖と云ニ 河とぬ
波よち 又要云終不波
立しへとみれハ八也
お云舟のある也 或説ニ
礒ニさよみ鄕者之 興倭
揖引折て 仙曰梶取
り舟をよせる方へやるを

貴寸 天地 日月與共尓
しき あめつち乃 月日とゝもに
満将行 神乃御面跡 次来
みちゆかん 神乃みおもと つきてくる
中乃水門 船浮而 吾榜来
中乃みなとに ふねうけて わかこきくれ
者時風 雲居尓吹尓 奥見者
ハ ときつかせ くもゐにふくに おきみれハ
跡位浪立 邊見者 白浪散動
あとゐなみたち へみれハ 白波さわく
鯨魚取 海乎恐 行船乃
いさなとり 海をかしこみ ゆくふね乃
梶引折而 彼此之 嶋者
かちひきをりて をちこち乃 しまハ
雖多 名細之 狭岑之嶋乃 荒
おほかれと なくハしき さみねのしまの あり
礒面尓 廬作 而見者 浪
そもに いほりして みれハ 波乃
音乃 茂 濱邊乎 敷妙乃 枕尓
おと乃 しけきはまへを しきたへの 枕に

川むるを川おりと云る也
名くはしさみねのしま
又安云名のおもしき也 八
雲抄ニ狹峯島 讃岐 王云
イ名ふるさ諸 説明
ありかへし 荒礒のある也
ありとも 磯乃いさや
ふよかへし 所それハ荒
ある床とは云也
いへしらハ 君乃妻かしらハと云
おほつかなく 方ゝをと同よ也
はしきつまらハ とかへて
仙曰とかへていましとハ
とかへておけなしらす
うはきとハ萩也 おりき
くれ人の名也

為而 荒床 自伏 君之
して あらとこに みつからふせる 君か
家知者 往而毛将告 妻知
いへしらハ ゆきてもつけん つましらハ
者 来毛問益乎 玉鉾之
きもとはましを 玉ほこの
道太尓不知 欝悒久 待加
みちたにしらす おほつかなく まちか
戀良武 愛伎妻等者
こふらん はしきつまらハ

反歌

妻毛有者 採而多宜麻之 佐美乃山
つまもあらハ つみてたけまし さみのやま
野上乃 宇波疑 過去計良受也
のゝうへのうはき すきにけらすや
奥波 来依荒礒乎 色妙乃
おきつなみ きよるありそを しきたへの

吾東和名白蕺蒿於八木
䒾芡草香作菱食之
哥乃心ハ此死人を悲
末に吹くよ島行くハ
いそにふるゝをしとを
なよすハなくしやゆ
ことなるも一説ニを莪之
かをりあるものなり

枕　等　巻　而　奈　世　流　君　香　聞
まくらとまきて　なせるきみかも

在石見國臨死時自傷作歌一首
柿本朝臣人麻呂
鴨　山　之　磐　根　之　巻　有　吾　乎　鴨
不知　等　妹　之　待　作　將有
かもやまの　いはねしまける　われをかも
しらにと　いもが　まちつゝあらん

なせるハ枕とまく君かなわし　と云まや山嵜
拾遺集ニハ　なきまつるきみをもと入　枕とまきてハ此集十ニ枕乃字也
在石見國臨死時　徹書記物語云三月十八日ハ人丸忌日なく　昔も
和哥あまく　毎月十八日に哥會ありしとなん　年号てうなく
かもやまの　いはねにまける　岩根かゝるゝや此哥　拾遺集ニハ
いもやまれ　いはねをなる我をのもしらすと　いもはまちつゝと云す
どもしらすて乃身に
やつハ明なりも

柿本朝臣人麻呂死時作歌二首

あつしとわかるゝさみ
石川乃貝ニまじりてと
云ハ岩根しまける汀
吾身を吟待くよする
るや石川石見ニ有人丸墓
さふおりて　かひしかね
景ニあらんと世ハ今ハなき
人なれハなくてよし　石川
を雲乃立隠れ形見
に見て堪無すへしと也
雲を云也の形見なする
行し浪ニよかへる玉を
よれ思をすてゝなそ
とこ先岩根ませる心
を擬と誂の告なん
ハ吉のゝて妹の心を擬

人麻呂妻依羅娘子
且今日且今日　吾　待　君　者　石　水　之
けふけふと　わかまつきみハ　いしかはの
貝尓　一云谷尓　交　而　有　登　不言八方
かひにまじりて　ありといはずやも
直　相者　相　不勝　石　川　尓
たゞにあひハ　あひもかねてん　いしかはに
雲　立　渡　礼　見　作　將偲
くもたちわたれ　みつゝしのばん

擬柿本朝臣人麻呂意報歌一首
丹比真人　闕名
荒　浪　尓　縁　來　玉　乎　枕　尓　置
あらなみに　よりくるたまを　まくらにおき
吾　此間　有　跡　誰　將　告
われこゝに　ありとたれかつげなん

一首　依舊本載茲

作者未詳

天離 夷之荒野尓君乎置而 念作有生 刀毛無 おもひしなえて有生けらなく

寧樂宮

和銅四年歳次辛亥雄嶋松原見嬢子屍悲歎作歌二首

河邊宮人

姫嶋之 妹之名者千代尓将流 姫嶋之 子松之末尓 千世尓将生 萬代尓 難波方 鹽干物有 曽祢沈之 おもひそわ 恋流日曽多 妹之光儀乎 見巻苦流思母

霊亀元年歳次乙卯秋九月志貴親王薨時作歌一首并短歌

笠朝臣金村

梓弓手取持而 大夫之 得物矢手挟 立向 高圓山尓 春野 燒 野火登見 左右 燎 火平 何如問者 玉鉾之 道来人乃 泣涙 霖霖尓落者 白妙之 衣泥漬而 立留 吾尓語 久 何鴨 本

霊亀 元正天皇年号

続日本紀七日 元京貢瑞

亀任之物天表瑞改和銅為霊亀

おつさ弓のふえ鈴そ 吹下す 名を的 よしゑやし 祇園うまひて 徳玉来 ゆかりとおもひ志貴親王を葬せ 成へ 衣ひつけて ひてく 衣ひつけて ひてもて 泊

神乃御門ニ乃
仙日乎百古麻之乃
御門乃人乃
皆悉小野乃
草乎刈敷而
廬為流
鳥自物
名負大君乃
命恐
見渡者
青丹吉
平山乎
越而徃者
天原
振放見
大神乃
御名乎
唱都追
畏伎
可聞

名言 聞者流耳師所哭
語者心胸痛
天皇之神之
御駕乎
手次之
首幾許照而有
反歌
高圓之野邊秋芽子
開香將散見人無尓
高圓之野邊之秋芽子勿散
君之形見尓見管思奴播武
御笠山野邊徃道者已伎大久毛
荒尓計類鴨
繁有可久尓有勿國
三笠山野邊從遊久道已伎大久毛
荒尓計類鴨
名國

祇日乎
うせのひくる
をえやと人とて
らんとよめり
秋萩
ちりうねいねかてし
ものを山のゆくえ
しらくもいこまさくらと
ちけくあれてうつろふ
と也
乃ろの字也
と感慨する心
と同じ
萬葉集卷第二終

貞享元年立秋日於新玉津嶋花草下重而書此一卷墨付五十一紙 季吟